

8. 採卵鶏農場におけるロイコチトゾーン病の発生事例

広島県東部家畜保健衛生所 ○^{まつもと}松本 ^{さおり}早織 ^{なかもつとむ}中光 務 ※
※ 現 農林水産局畜産課

1 はじめに

ロイコチトゾーン病は、ニワトリヌカカの吸血により媒介される原虫病で出血や貧血を主徴とする鶏の届出伝染病である。平成26年9月上旬、採卵鶏飼養農場1戸において、本病が発生したので、その概要を報告する。

2 発生概要

開放式低床鶏舎（飼養羽数：約2,200羽）の採卵鶏飼養農場において、平成26年9月5日、産卵率が1週間前から通常の6割程度に低下したと通報があり病性鑑定を実施した。翌日からは、貧血や死亡羽数も増加した。

3 方法

- (1) 疫学調査：発生状況、ワクチン接種歴等の聞き取り調査を実施した。
- (2) 病性鑑定：衰弱鶏4羽（240日齢以上）の病理、細菌及びウイルス学的検査を実施した。その他、別の衰弱鶏4羽（日齢不明）の血液塗抹検査及びヘマトクリット（Ht）値を測定した。

4 成績

血液塗抹検査で全羽にメロゾイトとガメートサイトとHt値の低値（22%以下）を確認した。解剖所見で全羽に鶏冠の蒼白化と脾臓の腫大を認め、組織所見からも諸臓器にシizont、その周辺部の多核巨細胞及びマクロファージによるシizontの貪食像が確認された。細菌、ウイルス検査は陰性であった。

5 まとめ

以上の成績からロイコチトゾーン病と診断した。発生要因として、当鶏舎には換気扇等はなく、周囲には水田が広がるなど、病原体を媒介するニワトリヌカカが発生しやすい環境であったことが推測された。対策として鶏舎内への防虫剤設置により続発を防止することができた。本県は5年ぶりに発生したが、全国的で散発しており、今後も農家へ予防対策の啓発が必要である。